

《研究ノート》

中国都市部における学区再編と学校間格差 —広東省江門市を事例として—

柴田 陽一

1. はじめに

日本では、公立学校の場合、居住地によりどの学校に通うかが指定されている。なにかしら特別な理由がないかぎり、居住地とは異なる学校に通学すること、つまり越境通学はできない。居住地により決められた通学区域は、学区あるいは校区と呼ばれ、地域住民にとって一つのまとまりとして認識されてきた。

もちろんすべての学校がまったく同じ教育をおこなっているわけではない。あそこの学区はガラが悪いといったうわさはよく耳にするところであろう。しかしながら、日本の教育は、全体としてはきわめて平均化されていて、どこの学校に通おうとも、だいたい同質の教育を受けられる状況にある。あくまでおおよそではあるが、日本では教育の機会均等が実現されているのである。

中国にも学区というものが存在している。ところが、日本とは違って学区間の差が大きいのが特徴である。むこうは名門校であり、こちらは一般学校で、教育の質に大きな開きが見られるといった事例が少なくない。かつて中国には「重点学校」という教育政策があ

った。限られた教育資源を特定の学校に集中させて、効率よくエリートを養成しようとする政策であった。しかし、1986年の義務教育法制定後は、この政策が見直され、どの学校も同じ質の教育をおこなえるように改革が進められてきた。「就近入学」の原則が打ち出され、居住地により指定された学校に通学することが基本となった。この政策は教育の機会均等を阻害するというのがその理由であることは言うまでもない。

しかし、実際のところは、その後もかつての重点学校に教育資源が集まる状況は変わらず、現在でも名門校として認識され、人々の注目を集めている。重点学校は教育経費や設備の面で一般学校を大きく凌駕しているし、質の高い教員が集まっている。親たちができれば子どもをそんな名門校に通わせたいと願うのも無理はなからう。

この願望を実現するには名門校の学区内に居住すればよいわけだが、実はこうした学区内では不動産価格が極端に高騰している。この名門校の学区内にある物件は「学区房」と呼ばれ、かなりの富裕層でないと購入できないほど高い値がつく事態も生じている。しかも厄介なのは、学区の範囲が毎年のように変化することだ。名門校に通うことのできたマンションが翌年からは別の学区に組み込まれることもありうる。住民や不動産屋は気が気でない。もう一つの方法は、越境通学である。これは制度上禁止されているのだが、越境入学費あるいは学校選択費ともいうべき「択校費」を支払って、名門校に子どもを通わせる親たちが数多く存在していたし、現在も一部存在しているようだ。択校費は寄付金や賛助費などと名目を代えて支払われる場合もある。または権力やコネ（関係）を使って裏口入学させる場合もあるらしい。

いずれの方法をとるにせよ、かつての重点学校に由来する学校間格差¹⁾は、名門校に子どもを通わせることのできる富裕層と、一般学校（非重点学校）にしか通わせることのできない非富裕層という階層の分断化と固定化を助長していると言わざるを得ない²⁾。

このように現在の中国では、2006年の義務教育法改正³⁾により義務教育はほぼ完全に無償となっているが、学校間格差はいまだになくなっておらず、そのことが多くの問題を発生させている。では、中国の都市部における学校間格差と学区再編は、住民たちの暮らしにいかなる影響を与えているのだろうか。住民たちはこうした教育の現状にいかなる考えをもち、いかなる対応・行動をとっているのだろうか。この中国の事例は、教育の機会均等とはいったい何を意味するのかという問題を考える際のヒントになるのではないだろうか。

本稿は、こうした問題意識に基づき、筆者が2016年8月6日（土）から15日（月）にかけて広東省江門市で実施した調査内容を紹介するものである。最終章では、調査で得られた知見に基づき、上記の問題に対する私見を述べたいと思う。

2. 調査メンバーと調査目的・内容の決定

(1) 教育班の結成

今回の調査は、京都大学の小島泰雄氏を代表者とする科研費（基盤研究（B））「中国華南の地域構造の再編に関する地理学的調査研究」（課題番号 15H05169）の一環として実施したものである。そのため、小島氏と筆者のほか、6人の日本の研究者が調査に参加した。ただし、全員が同じ調査をおこなうわけではない。各研究者はそれぞれ別の研究テーマをもち、それぞれ別の調査を実施した。筆者は教育関連の調査をしたわけだが、小島氏は農村関連の調査、別の人は観光関連の調査という具合である。

日本人が中国で調査を実施するには、良き協力者が必要となる。今回のカウンターパートは、広州市にある中山大学地理科学与規劃学院の劉雲剛（Liu Yungang）氏と彼の研究室に所属するポストドクターと院生たちであった。

さて、6日（土）に広州入りした筆者らは、翌7日（日）から調査活動を開始した。その日の午前は、中山大学の会議室に日本側・中国側参加者のほぼ全員が集まり、全体のミーティングをおこなった。はじめに劉氏と小島氏から今回の調査概要について説明があり、その後各班（農村班、都市班、経済班、観光班など）に分かれて調査内容について打ち合わせがおこなわれた。班というのは、それぞれ別のテーマをもつ日本の研究者と、中国側の院生あるいはポストドクターで構成される。筆者の属する教育班は、筆者と呉寅姍（Wu Yinshan）さん、ポストドクターの馮雷（Feng Lei）さんの3人である。ただし、馮さんは途中から別の班の調査に協力することになったため、実質的には筆者と呉さんの2人と言ってよい。呉さんは、調査時は広州市にある華南師範大学を卒業したばかりで、9月から中山大学の大学院生となることが決まっていた。

午後は劉氏より江門市の概要についての説明を受けた後、チャーターしたバスに乗り込み広州市を離れ、江門市内の見学等をおこなった。

(2) 調査目的・内容の決定

8日（月）は調査参加者全員で江門市住房和城郷建設局（住宅都市農村建設局）を訪ねた。中国で調査をおこなうときは、こうした行政の協力を得られるかどうかで調査の深度に大きな違いが生じるからだ。9時から14階の会議室で、副局長ほか3人の方に挨拶。調査内容を説明し、意見を求めた。10時すぎに終了し、以後は班ごとの活動に移った。

教育班の3人は、建設局の1階で約2時間半、調査内容の打ち合わせをおこなった。そこで確認したことは以下のとおりである。

まずは、今回の調査目的が、中国都市部における学校間格差と学区再編に影響を受ける住民の生活意識や心情の究明にあり、それを通じて教育の機会均等とは何かを考えてみた

いということである。次に、調査内容としては、事例として江門市蓬江区中心部を取り上げ、小学校の所在地の確認と周辺の景観観察、近年の統廃合の有無の確認、学区（新入生募集区域）の改変状況の確認を主眼とすること。教育局（日本の教育委員会に相当）、不動産屋、小学生の子どもをもつ保護者を訪ね、学区の設置基準、学区の変化、各学校の評判・レベル・ランクの違い、越境通学の有無、学区房の購入、不動産の価格の変動などについて聞き取りをおこなうこと。余裕があれば、図書館で統計などの資料収集をしたり、比較のために隣の新会区の学区の状況を確認したりすることである。先に言っておくと、教育局については、今回は残念ながら全く協力が得られなかった。

要するに、中国でも教育の機会均等が叫ばれて久しいが、制度と現実には違いが見られるはずである。その違いを確認し、それが生まれる原因を具体的な事例から探ることがポイントだという点で、見解の一致を見た。

3. 学校の所在地調査と周辺の景観観察

(1) ホテル付近（北の新市街地）

8日（月）の午後から、小学校の所在地の確認と周辺の景観観察のための調査を始めた。中国の都市では、「城市図」と呼ばれる都市図が街角でよく売られている。今回の調査でも、一枚物の『江門市指南地図』⁴⁾の一部である「江門市中心城区図」を主に利用した。それに加えて、グーグルに代わる検索エンジンである百度(Baidu)の地図機能も利用した。

しかし、小学校の所在地にかんする調査は、思ったほど簡単ではなかった。近年、統廃合されたり、名称が変更されたり、新設されたりした学校の情報がそれらの地図にすべて反映されているわけではないからである。その結果、8日午後、9日と10日は全日、11日午前、13日午前をこの調査に費やすことになった。後述するように、11日午後の聞き取りや、12日の図書館での資料調査により、すでに確認した小学校以外にもいくつかの学校の存在が明らかになったためでもある。

今回の調査で確認できた小学校の一覧と所在地を、図1「江門市中心部の小学校の所在地」と表1「江門市中心部の小学校一覧」にまとめた。筆者が言うところの「江門市中心部」とは、おおよそ図1の範囲である。つまり、江門市政府と蓬江区政府が置かれている蓬江区の中心部のことであり、より具体的には、北は「華安路」、東は西江、南は江門河、西は「西環路」に囲まれている範囲のことである。各小学校に割り当てた番号は、図1も表1も同じである。以下で小学校に言及する際は、図1・表1の番号を付記する。

さて、8日の午後に見て回ったのは、北の新市街地にあるホテル（江門博悦公寓酒店、図1の注記「蓬江区」のすぐ上にある江門万達広場に位置）付近の紫茶小学（北校区）〔⑨〕と丹灶小学（篁莊分校）〔⑳〕である。2011年に新設された紫茶小学（北校区）は、省級

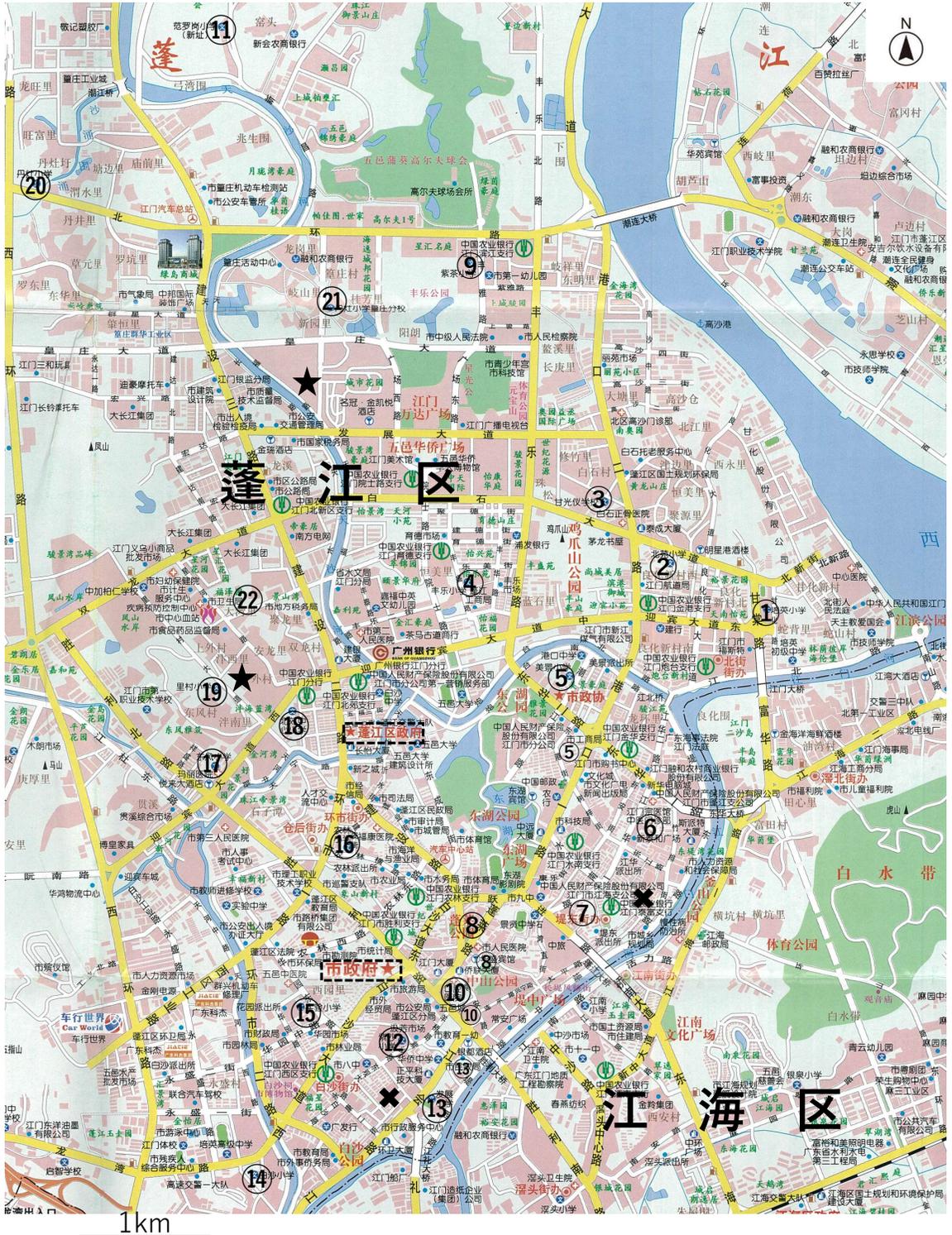


図1 江門市中心部の小学校の所在地

表 1 江門市中心部の小学校一覧

番号	学校名	旧称	住所	ランク	児童数	教職員数	教職員一人当たりの児童数
1	培英小学	北街	甘化路 80 号	省重点	1288	64	20.1
2	北苑小学	—	良化新村西 128 号	市重点	1343	67	20.0
3	甘光儀小学	—	白石聯興村	普通	1233	65	19.0
4	豊楽小学	耙冲	楽福路 2 号	市重点	1221	63	19.4
5	美景小学	—	潮江二横路 2 号	省重点	1947	98	19.9
	美景小学 (分校)	水南	水南王辺里 1 号	省重点			
6	江華小学	江海	江華一路 116 号	省重点	1791	105	17.1
7	啓明小学	—	躍進路 60 号	省重点	1937	96	20.2
8	紫茶小学 (南校区)	—	建設路 30 号之一	省重点	4332	217	20.0
	紫茶小学 (泰寧里校区)	中山	泰寧里 128 号	省重点			
9	紫茶小学 (北校区)	—	豊雅路 23 号	省重点			
10	範羅岡小学 (校本部)	—	象溪横路 12 号	省重点	2530	125	20.2
	範羅岡小学 (紫茶路校区)	—	紫茶路与勝利路交叉口北	省重点			
11	範羅岡小学 (濱江校区)	—	体育路西 200 米	省重点			
12	紫沙小学	—	紫沙路 70 号	省重点	1652	82	20.1
13	發展小学 (本部)	—	江会路	省重点	1546	76	20.3
	發展小学 (紫坭路校区)	愛民	紫坭路 26 号	省重点			
14	陳白沙小学	白沙	白沙沙富里路 115 号	普通	1223	60	20.4
15	実験小学	—	華園北路 1 号	省重点	1407	82	17.2
16	農林小学	—	農林横路 21 号	省重点	1829	100	18.3
17	東風小学	—	迎賓大道西 106 号	市重点	1173	60	19.6
18	北郊中心小学	—	北郊天沙四路 7 号	省重点	1385	72	19.2
19	裏邨小学	—	環市鎮裏邨中勝里 1 号	区重点	625	34	18.4
20	丹灶小学 (校本部)	—	環市鎮聯合	普通	1055	56	18.8
21	丹灶小学 (篁莊校区)	篁莊	篁莊大道	普通			
22	農林双朗小学	—	大湾里 91 号	—	—	—	—
×上	堤東小学	—	—	—	—	—	—
×下	造紙廠子弟小学	—	—	—	—	—	—

注 1) 番号は蓬江区教育局による「蓬江区中心城区 2016 年小学招生地段安排通告」に合わせた。図 1 ととも一致。

2) 住所はすべて「江門市蓬江区」を省略している。

3) ランクは「江門市蓬江区公辦小学名録」に基づいている。

4) 児童数・教職員数は 2015 年 10 月時点のもの。

(省レベル) の重点小学であり、現在の江門市で最も良いとされる名門校である。写真 1 を見ると、まだ新しく大変立派な校舎であることがすぐに分かるだろう。正門脇の「榮譽牆 (Wall of honor)」(写真 2) には「中国教育学会実験学校」「教育部—IBM 合作“基礎教育創新教学”項目学校」「英特爾 (Intel) 未来教育項目推广示範学校」といったプレート

が 25 個も掲げられている。このプレートの数は、学校の「名門」度を示す指標のようだ。紫茶小学（北校区）の周りには、真新しいマンションが立ち並び、音楽や美術の学習塾も集まっている。この学校が名門であることを、周辺を歩くだけで強く印象付けられた。

次に見た篁荘村の中にある丹灶小学（篁荘分校）は、紫茶小学（北校区）とは対照的である。校舎はごく一般的なものであるが、紫茶小学（北校区）を先に見てしまうと、かなり見劣りがする。学校のそばにある雑貨店の店主に、学区の範囲や越境通学について尋ねてみた。彼の話によると、丹灶小学（篁荘分校）に通う小学生は、付近にある昔からの住宅に住んでいるらしい。すぐ近くに建てられた高層マンション（写真 3）に住む人たちは、丹灶小学（篁荘分校）ではなく紫茶小学（北校区）に入学することができる。どこの学校に入学できるかは、マンション単位で決まっている。単なる空間の広がりや、学区が決めているわけではないようだ。しかし、彼は次のように続けた。丹灶小学（篁荘分校）付近に住んでいても、紫茶小学（北校区）に入学する方法はある、と。それはどのような方法なのか、ぜひ教えてほしいと筆者らは詰め寄ったが、店主は結局その方法については口をつぐんだ。

(2) 北の新市街地から南の旧市街地へ

9 日（火）の午前は、まず、ホテルの南にある甘光儀小学 [③] にタクシーで向かう。門番の話によると、10 年くらい前に校舎を新築したらしい。通学しているのは付近の住民の子どもたちであり、学区内に部屋を買えば誰でも通えるとのことであった。徒歩で北苑小学 [②] へ。正門の向かいに幼稚園があり、その前にいた幼稚園児の母親らしき人達に話を聞いてみた。彼女らによると、近くにある甘光儀・北苑・培英の 3 校のうち、培英が最も良いらしい。特に道德教育の面で優れているようだ。蓬江区で最も人気がある小学校は、紫茶 [⑧⑨]・範羅岡 [⑩⑪]・江華 [⑥]・実験 [⑮] の四つであるという。現在は基本的には越境通学はできないが、もしもある学校の定員がオーバーしてしまった場合は、隣の学校に通学することが可能であるとのことであった。数年後に自分たちの子どもが小学校に通うからだとして推測されるが、小学校の評判や越境通学などに対して、随分と熱く語る様子が印象的であった。

徒歩で培英小学 [①] へ。その途中で通りかかった学習塾「金田教育培訓中心」では、窓に講師の紹介が貼ってあり、紫茶および範羅岡小学を退職した教員を写真入りでアピールしていた（写真 4）。この講師紹介は、先ほどの母親と同様に、紫茶と範羅岡の両校を名門校だとする住民の意識が一般的であることを、よく表しているといえよう。培英小学は、母親達が語ったように、3 校の中では最も設備が立派であった。学校の中に掲げられているプレートは 21 個もある。ただし、紫茶小学（北校区）のような IBM や Intel の文字が入

ったプレートは見当たらなかった（写真5）。こういうところに「真の」名門校との違いがあるのであろう。

タクシーで豊楽小学〔④〕へ。校舎の造りはごく普通。周辺は比較的古い住宅が多いように感じられた。徒歩で美景小学〔⑤〕へ。規模が大きく、割と良い感じに見える。プレートの数は16個だった。昼の休憩を挟み、午後は大通り（東華二路）を渡ってもう一つの美景小学〔⑤小さい方〕に向かう。インターネットによる地図検索の結果、新たに見つかった学校である。行ってみると、先ほどと同様、門に「美景小学」と記されている。なぜ二つの美景小学があるのだろうかという疑問が出てくる。そこで周辺の店で話を聞いてみると、こちらが小学校で、午前に見た美景小学が実際は中学校だと主張する人がいた。にわかには信じがたい話であった。後に不動産屋への聞き取りの結果、この話は間違いだということが判明することになる。

徒歩で江華小学〔⑥〕へ。ここは間違いなく重点学校であるという雰囲気漂っていた。英語教育に力を入れていることが、掲示板や遊具などから一目瞭然である。プレートは確認できたものだけで13個あった。さらに徒歩で啓明小学〔⑦〕へ。こちらも重点学校らしい。書道をはじめとする芸術や体育を重視しているようだ。プレートは12個確認できた。

タクシーで中心部の南端にある陳白沙小学〔⑭〕へ。明代のこの地方の学者である陳白沙の名を冠してはいるが、ここはごく一般的な造りで、間違いなく一般学校だと判断できる。プレートは6個のみであった。

タクシーで発展小学〔⑬〕へ。ここは重点学校のような。「発展少年宮」（「少年宮」は子どものための課外教育施設）が併設されており、小学生達がプールで楽しそうに泳いでいた。プレートの数は16個である。徒歩で造紙廠子弟小学〔×下〕へ。周辺はかなり古い建物が目立つ。外壁に書かれた建造年代を見てみると1918年建造のものもあった。その建物に住む人に話を聞くと、この建物は自分の祖父が建てたものであると教えてくれた。昔このあたりは町ではなく、農村の一部であり、周りには野菜を育てたり、家畜を飼ったりする風景が広がっていたという。別の住民の話によると、造紙廠子弟小学（写真6）は10数年前に発展小学に合併されたという。もともとは工場で働く職員の子供だけが入学できたらしい。造紙廠は「江門造紙企業集団公司」と名前を変え、江北大橋を渡った南側に今も存在していることも分かった。

(3) 南の旧市街地から西の新市街地へ

10日（水）から馮さんは別の班の調査を手伝うことになり、教育班は呉さんと2人になった。午前は、まず、タクシーで範羅岡小学（紫茶路校区）〔⑩小さい方〕へ。校舎は比較的立派だが規模は小さく、周辺に学習塾が集まっている様子もない。重点学校と聞いてい

たので、やや意外な感じを受けた。徒歩で蓬萊公園の北にある紫茶小学（南校区）〔⑧〕（写真7）へ。こちらは明らかに重点学校という雰囲気である。紫茶小学（北校区）〔⑨〕と同じく、「教育部—IBM 合作“基礎教育創新教学”項目学校」「英特爾（Intel）未来教育項目推広示範学校」などのプレートが掲げられていた。その数、計19個である。徒歩で範羅崗小学（校本部）〔⑩〕（写真8）へ。ここも重点学校なのだが、プレートの数は紫茶小学（南校区）よりも少ない。「範羅崗少年宮」が併設されていた。

徒歩で紫沙小学〔⑫〕へ。周りはかなり古い町並みで、狭い路地には多くの店が軒を連ね、随分と賑やかであった。しかし、この小学校も情報によると重点学校であるのだが、紫茶小学（南校区）と比べるとかなり見劣りがした。続いて、徒歩で実験小学〔⑬〕（写真9）に向かう。丘の上に登っていく感じだった。実験小学は、そばの大通りよりもさらに高い位置にあった。最上部が円筒形の特徴的な建物や、プールやスクールバス（併設の幼稚園が使用しているもの）もあった。プレートも11個あり、明らかに重点学校という感じである。徒歩で農林小学〔⑭〕へ。ここも見ると明らかに重点学校である。「UNESCO EPD Member School（联合国教科文組織環境人口与可持續發展教育（EPD）項目成因学校）」（ユネスコのEPDプロジェクトメンバーの学校。EPDとは Educating for a Sustainable Future: Environment, Population and Sustainable Development を指す）と記されたプレートを含め、その数は12個であった。体育にも力を入れているらしい。小学校の周辺には、英語・美術・音楽など数多くの学習塾が立ち並んでいる。

タクシーで北郊中心小学〔⑱〕付近に移動し、昼の休憩。午後はまず、北郊中心小学の観察から始めた。ここも重点学校らしいが、午前を訪ねた実験小学〔⑬〕や農林小学〔⑭〕に比べると見劣りがする。プレートは7個のみであった。続いて、徒歩で東風小学〔⑰〕に向かうことにした。「迎賓大道西」の北西側は、老朽化した住宅が密集する、いわゆる「城中村」の裏邨（簡体字の表記は「里村」）地区である。もともとは都市戸籍の人が住んでいたが、現在ここは外来人口の受け皿となっている。道を間違えてその中に足を踏み入れてしまった。

悪臭が漂い、汚く濁った水が流れる小河川の両側に、かなり古い家が建っている（写真10）。現在は使われているか不明の市場のそばには、小さな商店が立ち並んでおり、それなりに賑わいを見せていた。ある商店で東風小学の所在地を尋ねると、宿題をしている子どもを案内によこそうとしてくれたが、子どもが嫌がったので結局自分たちで行くことになった。その母親の説明だと簡単に東風小学に行けそうであったのに、結局は大回りした挙句、迷い込む前に歩いてきた道まで戻ることになった。どうやら住民は小学校への抜け道を知っているらしい。筆者たちにはそれが分からなかったのだ。

もとの「迎賓大道西」まで戻り、少し南西に進むと、右側に東風小学を発見した。ここ

は見るからに一般学校である。裏邨大道を通り、徒歩で裏邨小学〔⑱〕（写真 11）に向かう。裏邨小学は、東風小学付近から続いている先ほど迷い込んだ城中村の中にある。ここも明らかに一般学校であった。裏邨大道の北側は新しく建てられた高層マンション「泮海藍湾」、南側は城中村であり、道の南北で極めて鮮明なコントラストをなしている。徒歩で農林双朗小学〔㉒〕（写真 12）へ。途中は未舗装の道もあったが、農林双朗小学は新設されたばかりでとても立派である。看板によると、6 学年 36 クラスの規模となるのは 2017 年のことであるが、2016 年 9 月から開学するとあった。それに合わせた動きだと考えられるが、学校の向かいに託児所のようなものも、まさに建設中であった。

(4) 最北の新市街地へ

11 日（木）の午前は、タクシーで北の範羅岡小学（濱江校区）〔⑩〕へ。「保利大都会」というマンション付近にある。周辺の建物の中にはまだ完成していないものも多い。高層マンションと別荘のような立派な家が目立つ（写真 13）。それらに混じって、建設作業員の仮設住宅（3 階建て）もあった。小学校はかなり大規模で立派な校舎である（写真 14）。2015 年 9 月に開学したばかりで、2016 年 9 月から 2 年目が始まるらしい。周辺を歩いていると、「你的孩子，也有成為国王的可能」（あなたの子どもも国王になる可能性がある）と書かれた「保利大都会 範羅岡小学／国際双語幼兒園」（「双語」はバイリンガルの意味）の広告（写真 15）や、「名校圈 範羅岡学位護航孩子未来」（範羅岡の学位が子どもの未来を守る）と書かれた「珠江御景山莊」というマンションの広告（写真 16）が目に入った。子どもを名門校に通わせるために住宅購入を考える人がいることを、こういう広告をよく示している。そういう人たちにとっては、この広告のコピーはまさに殺し文句と言ってよい。

徒歩で丹灶小学〔㉑〕へ。レストランや商店が立ち並んでいる丹灶聯合村という集落の一番西に小学校があった。ここは明らかに一般学校である。校舎は 2006 年建設したと書かれている。1 学年 4 クラスの規模のようだ。

ここまでの調査で、江門市中心部の小学校の所在地はすべて確認したはずであった。しかし、同日午後から始めた聞き取り調査で、実は他にもいくつかの小学校があることが分かってきた。実地調査の面白さはこういうところにあるのだろう。

4. 聞き取り・資料調査から再び所在地調査へ

(1) 不動産屋での聞き取り調査と所在地調査の補足

11 日の午後からは、所在地調査から聞き取り調査へ重点を移した。それ以前にも店頭や街頭で何人かの人に話を聞いてはいたが、今回まとまった話を聞くことができた人（イン

フォーマント) は、9組12人である(表2)。

表2 インフォーマント一覧

番号	日時	性別	年齢	出身	居住地	身分・立場	聞き取り場所	備考
1	8月11日	男性	30歳前後	不明	不明	店員	万達広場にある江門博悦公寓酒店そばの「家順」(不動産屋)	二人の子ども。農林小学と中学(紫茶小学を卒業)に通学中
	8月11日	男性	30歳前後	不明	不明	店員		
	8月11日	男性	40歳前後	湖南	農林小学付近	店員		
2	8月11日	男性	30歳前後	不明	不明	店員	紫茶小学(泰寧里校区)そばの「錦綉地産」(不動産屋)	範羅岡小学の3年生の子どもがいる
	8月11日	男性	30歳前後	不明	不明	店員		
3	8月12日	女性	30歳前後	不明	不明	店員	江門市文化城の向かい(美景小学付近)の不動産屋	
4	8月13日	男性	40歳前後	江門	美景小学付近	住民、保護者	美景小学付近のレストラン	子どもが美景小学を卒業し、現在は華僑中学に通学中
5	8月13日	女性	60歳前後	江門	紫茶小学(泰寧里校区)付近	住民、保護者	中山公園	孫が幼稚園に通学中
6	8月13日	女性	30歳前後	広西	江門市広播電視大学付近の賃貸	住民、保護者	中山公園	子どもが今年小学1年生になる
7	8月13日	女性	30歳前後	不明	不明	店員	泮海藍湾のマンションギャラリー	元小中学校教員
8	8月13日	男性	30歳前後	不明	不明	運転手	農林双朗小学から萊茵華庭に向かうタクシーの中	
9	8月13日	男性	30歳前後	不明	不明	店員	萊茵華庭のマンションギャラリー	

まず、ホテル入口のそばにある不動産屋を訪ねて、学区や学区房について話を聞いた[インフォーマント1]。計3人の店員が応対してくれたが、最も詳しい話を聞かせてくれたのは、子どもが2人いて実際に小学校や中学校に通わせている40歳前後の男性店員であった。

彼によると、ホテルの西にある「城市花園」というマンションは、2015年までは紫茶小学(北校区)の学区であったが、2016年からは農林双朗小学の学区に変わった。しかし、2015年までにいったん紫茶小学に入った児童は、そのまま卒業まで同校に通えるそうだ。2016年から紫茶小学(北校区)の学区は五つのマンション(上城駿園、嘉悦名都、星匯名庭、海逸城邦、東方雅居)に限定されたい。なぜその五つのマンションが残り、それ以外の三つのマンション(都市豪庭、城市花園、萊茵華庭)が学区から外されたのか(表3)についても、彼なりの考えを話してくれた。

表3 3つのマンションが属する学区の変化（2012-2017年）

	2012	2013	2014	2015	2016	2017
城市花園	紫茶(北校区)	豊楽	紫茶(北校区)	紫茶(北校区)	農林双朗	農林双朗
都市豪庭	紫茶(北校区)	丹灶(簞莊分校)	紫茶(北校区)	紫茶(北校区)	農林双朗	農林双朗
萊茵華庭	—	—	紫茶(北校区)	紫茶(北校区)	農林双朗	農林双朗

注1) 2012-2017年の「蓬江区中心城区小学招生地段安排通告」を基に作成した。

彼の考えでは、紫茶小学（北校区）からの距離と、小学校建設に対するマンションのデベロッパーの貢献度によって決まるようだ。貢献度というのは、小学校建設に際していくら金を出したかということである。これは紫茶小学（北校区）だけに限った話ではなく、新設の農林双朗小学でも同様であるようだ。この背景には、公立学校であっても、政府の資金のみで学校建設がおこなわれるわけではない中国ならではの事情がある。したがって、貢献度の高かった「東方雅居」（デベロッパーは江門金輝房地產開発有限公司）というマンションは、紫茶小学（北校区）からやや距離が離れているにもかかわらず、まだ学区から外れられていないというのである。しかし、貢献度が高かったからといって、ずっとその地位が守られるわけではない。だから、もし紫茶小学（北校区）に確実に子どもを通わせたいならば、「東方雅居」はやめておく方が賢明だという話であった。

店員たちがしきりに強調したのは、「学位房」と「学区房」の違いと学校のランクである。まず、前者については、「学位房」は購入して住めば、必ず名門校に通えるものを指す。それに対し、「学区房」は毎年発表される教育局の通告次第で名門校の学区に入るかもしれないし、外れるかもしれないものを指すようだ。要は名門校に入学できる保証の有無が両者の違いなのだが、そうになると、多くのデベロッパーは後で問題となることを恐れ、自らが売り出しているマンションを「学位房」だとは言わず、「学区房」と宣伝するにとどめる傾向が徐々に顕著になってきているらしい。

次に、学校のランクについては、1位が紫茶、2位が範羅岡、3位が農林、4位が実験、5位が江華であるという。なかでもツートップの紫茶と範羅岡は広東省レベルで見ても名門校であり、群を抜いている。3-5位はあくまで江門市レベルで見ただけの名門校らしい。学校間における教員の異動は少なく、やはり名門校に質の高い教員が集まる傾向にあるようだ。その結果、名門校では学風、教員、試験問題の難易度などが一般学校とは大きく異なり、児童たちはしっかりと基礎学力を身につけることができ、結果として中学や高校に進学する時にも有利に働くという。この名門校の良さについては、店員の子どもが実際に紫茶小学（南校区）で学んだ経験に基づく話であり、かなり説得力があるように思え

た。

彼らの話は多岐にわたったが、小学校の所在地の確認という点で気になったのは、もとの紫茶小学（南校区）〔⑧〕にもう一つの校地があるという話であった。

そこで、中山公園の北側にあるという彼らの情報を頼りに、その校地を訪ねてみると、紫茶小学（泰寧里校区）〔⑧小さい方〕があった。以前も付近を通ったにもかかわらず、全く気付かなかったのが不思議なぐらいである。

校門のそばにある不動産屋を訪問して、先ほどと同様に学区や学区房について話を聞いてみた〔インフォーマント 2〕。応対してくれた 30 歳前後の 2 人の男性店員によると、紫茶・範羅岡・美景小学の校地が二つずつあるのは、片方で 1-2 年生、もう片方で 3-6 年生の面倒を見るからだという。人数が多くなりすぎ一つの校地では手狭になってしまったための措置であるらしい。ただ、少なくとも紫茶・美景小学の片方の校地は、もともとは別の名前の小学校であったようだ。何年か前に統合され、いまは名前が使われなくなってしまったという。彼らは 2010-2016 年までの学区（新入生募集区域）が記された資料を持っていた。一部はインターネットから、一部は『江門日報』や『五邑都市』という新聞から作成した資料らしい。最初は撮影を許可してくれたが、途中から難色を示し始め、全部撮影することはできなかった。そのため、本稿ではインターネットから入手した、蓬江区教育局による 2012-2017 年の「蓬江区中心城区小学招生地段安排通告」（小学校の新入生募集区域指定通告）を資料としている。

店員によると、学区（新入生募集区域）は時には少し変化するものの、概して変化は大きくないという。しかし、それは旧市街地について言えることであり、北の新市街地では紫茶小学（北校区）のように大きく変化する場合がある。紫茶小学（北校区）の学区（新入生募集区域）から外されたマンションでは、一夜にして価格が暴落したそうだが、したがって、これまでの数年は新市街地に住宅を買って旧市街地から出て行く人が多かったが、最近逆は旧市街地へと戻って来る人も現れている。なぜなら、住民が増加した新市街地では、名門校の児童数がすでに収容限度に達しようとしており、購入した住宅がいつ名門校の学区（新入生募集区域）から外されるか分からないからだ。新設の農林双朗小学の付近はまだ開けていない農村地区であり、我が子を農村の子どもたちと一緒に勉強させたくないと思える人も多いという。

(2) 図書館での資料調査

12 日（金）は聞き取りをいったんやめて、図書館で資料調査をおこなうことにした。午前は五邑大学図書館を訪れた。2 階が入口なのだが、その階しか電気や冷房がついてない。どうやら夏季休暇中のためらしい。専門書の置いてある上の階に行きたければ、自由に見

てよいとのこと。3階・4階・7階で教育関係の本や統計年鑑を探し出し、一部撮影させてもらった。冷房が効いておらず、且つ薄暗いという劣悪な条件下ではあったが、それなりに資料を収集することができた。

午後は江門市五邑図書館を訪れた。1時半に到着したが、地方文献部は2時半まで昼休みだったため、道の反対側の不動産屋に行き、30歳前後の女性店員に学区や学区房に関する話を聞いた〔インフォーマント3〕。店舗の狭いこの不動産屋の扱う物件は付近のものが大半を占めているらしく、離れた場所の状況についてはよく知らないようで、さして耳新しい情報は得られなかった。ただ、この店員によれば、旧市街地の学校は、どれも大した違いがないというのが住民たちの受け止め方だということであった。

2時半が近づいたので不動産屋を出て、再び図書館へ。4階の地方文献部を訪ねると、書架の並んでいる所には入らせてもらえなかったものの、資料名を伝えればすぐに持ってきてくれた。2010-2015年の『江門統計年鑑』⁵⁾、2011年の『江門市志』⁶⁾、2012年の『江門市蓬江区志』(以下、区志と記す)⁷⁾の一部を撮影した。統計年鑑や市志の情報は市・区全体を対象としたものであり、今回の調査には余り役立ちそうではなかった。一方、区志(634頁)に掲載された「2004年江門市蓬江区属小学基本情況」というリストは、小学校の所在地の調査をさらにおこなう必要性を知らせてくれるものだった。なぜなら、リストの中に水南、堤東、愛民、中山小学という四つの未知の小学校を発見したからである。おそらくはすでに閉校したのだろうが、現在どのような状況になっているかを確かめるため、リストに記された住所を頼りに翌日行ってみることにした。

(3) 区志に記載された未確認の小学校を探して

13日(土)の午前は、区志の情報を頼りに小学校の所在地調査の補完作業に取り組んだ。まず、タクシーで2004年にはあったとされる水南小学に向かった。住所の場所にたどり着くと、そこは水南農貿市場(自由市場)だった。雨が土砂降りだったので、付近のレストランで休憩を取る。たまたま相席になった40歳前後の男性に水南小学について尋ねてみた〔インフォーマント4〕。生まれてからずっとこの付近に住んでいる地元の人である。彼によると、この付近に小学校はなく、「水南王辺里1号」という住所は先日訪れた美景小学〔㊦小さい方〕の場所を意味するものであるという。つまり、タクシーの運転手が住所の場所を理解していなかったのである。彼によると、規模の小さい美景小学〔㊦小さい方〕は2-3年生が使用し、規模の大きい方〔㊥〕は1年および4-6年生が使用するそうだ。約7年前(2009年か)に水南小学は美景小学に改名し、以後二つの美景小学が生まれたのだと得意げに話してくれた。

次に、徒歩で昔はあったらしい堤東小学〔×上〕へ。「阜元里44号」という住所に着く

と、そこは蓬江区文化館（写真 17）であった。門が開いていたので中に入ってみると、バスケットボールをしている男性がいた。この場所の歴史について尋ねてみたが、ほとんど何も知らないようだ。続いて、運動場の隅にある建物から出てきた女性に話を聞くと、たしかにここはかつて堤東小学であったという。門番にも聞くと、2007 年に文化館ができ、堤東小学の児童は啓明小学に通うことになったそうだ。門の外にも文化館の紹介があり、2007 年 6 月末にこの場所に移ってきたと記されていた。

さらに、タクシーで区志のリストに載っていた愛民小学へ向かった。「紫坭路 26 号」という住所は、先日訪れた発展小学 [⑬] の北東の場所を指している。到着すると、現在は発展小学（紫坭路校区）[⑬小さい方] に変わっていた。付近の商店で話を聞くと、5 年前（2011 年か）までは愛民小学であったが、その後 2 年間は範羅岡小学の校地に、そして 3 年前（2013 年か）から発展小学の校地になったと教えてくれた。たしかに範羅岡小学（校本部）[⑩]・同小学（紫茶校区）[⑩小さい方] も北に歩いてすぐの場所にある。しかし、そうだとすると、3 年前まで範羅岡小学は校本部と紫茶路校区に加えて、この紫坭路校区という三つの校区をもっていたことになる。

本当に三つも校区をもっていたのかという疑問が湧いてきたので、改めて徒歩で範羅岡小学（紫茶路校区）[⑩（小さい方）] を訪れてみた。門番や付近の商店で話を聞いてみると、紫茶路校区はもともと紫茶小学 [⑧] が使用していたが、3-4 年前（2012-2013 年か）に範羅岡小学の校区になった。現在は範羅岡小学の 1-2 年生がここを使用しているらしい。校門に記された学校名を子細に見てみると、「紫茶小学」という文字が剥がされた痕跡が残っており、ここがかつて紫茶小学の校区であったことを示していた（写真 18）。また、付近の商店の人の話から、中山公園の北にある紫茶小学（泰寧里校区）[⑧小さい方] が、もともと範羅岡小学であったという説も出てきた。この説の真偽を確かめるため、中山公園を抜けるルートで紫茶小学（泰寧里校区）に向かった。

休日の公園内では多くの人々が談笑したり、トレーニングに勤しんだりしていた。このあたりのことをよく知っていそうな人を探していると、太極拳をしている 60 歳前後の女性 [インフォーマント 5] を見つけた。嫁いで来て以来ずっと公園付近に住んでいるという彼女の話によると、紫茶小学（泰寧里校区）はかつて中山小学であった。設立当初の紫茶小学は中山小学の場所にあったが、後に現在の紫茶小学（南校区）[⑧] の場所に移ったという。「中山」という名前（それまでは「中山校区」と呼ばれていた）が使われなくなったのは、2 年前のことらしい。この女性の話により、紫茶小学（泰寧里校区）が範羅岡小学の校区であったという先ほどの説は、否定されたことになる。

子どもを遊具で遊ばせていた 30 歳前後の女性 [インフォーマント 6] にも話を聞いてみた。広西壮族自治区出身の彼女は、2005 年に給料の高い仕事を求めて北京から江門にやっ

て来たらしい。長らく一時的に居住する人のための「暫住証」しかもらえなかったが、2015年になってようやく「居住証」を取得できた。しかし、「居住証」を取得してから半年が経過していなかったため、2015年は子どもが新入生募集対象に入れてもらえなかった。2016年は晴れて小学校に入学することになったものの、居住地（江門市広播電視大学付近）を学区（新入生募集区域）とする農林小学〔16〕ではなく、かなり離れた発展小学〔13〕に通うことを余儀なくされるそうだ。その理由は、教育局がまず学区内に住む地元の人、次に学区内に住宅を買った人、最後に他の地方から来た労働者の子どもという順で新入生を決定していくからだという。つまり、優先順位が最も低い彼女の子どもは、学校間の人数調整に使われたのである。賃貸住宅に住む地方労働者が学区制度において差別的扱いを受けていることがうかがえる話であった。

以上により、区志のリストに記載された未確認の小学校を、すべて突き止めることができた。と同時に、これでようやく所在地調査を終えることができた。その結果が、図1「江門市中心部の小学校の所在地」と表1「江門市中心部の小学校一覧」なのである。

5. マンションギャラリーでの聞き取り調査

(1) 「泮海藍湾」

13日午後は、二つのマンションを訪れ、併設されたマンションギャラリーで聞き取りをおこなった。まず訪れたのは、裏邨大道の北側にある「泮海藍湾（Blue Sea Island Resort）」（写真19、★下）というマンションである。マンションギャラリーで、元小中学校教員という経歴をもつ30歳前後の女性販売員〔インフォーマント7〕から話を聞いた。

このマンション開発は裏邨（正確には、江門市裏邨房地產有限公司というデベロッパー）が手がけており、数年後には城中村の部分もなくなって、一帯は高層マンションと、ショッピングモール・ホテル・オフィスなどが集まる「商業総合体」に建て替わるそうである。ギャラリーの壁には開発の全体像を示した地図（写真20）が掲げられている。その地図や模型などを見ながら、販売員の説明を聞いた。迎賓大道と裏邨大道の北西部分を占める第一期（2010年に開発を開始）の区画は、すでに完成し居住者もいる。ギャラリーが位置する第二期の区画は、建設の真っ最中である。しかし、それも来年の春節前（2017年1月頃）までには完成するという。第三期および「商業総合体」となる区画は、現在は城中村となっているところを使用し、もちろん城中村の中にある裏邨小学も取り壊す予定であるようだ。

販売員によると、現在の「泮海藍湾」は裏邨小学の学区であるが、新設の農林双朗小学は私たちの会社（デベロッパー）が提供した土地に建てられたものであるから、マンションに住めばいずれ農林双朗小学に通うことができるそうだ。おそらく来年には問題なく通

えるようになると考えているらしい。というのも、今年はマンションに住む入学対象者は3人だけであったが、政府と交渉した結果、裏邨小学ではなく農林双朗小学に入学できたからだ。

しかし、不安要素が全くないわけではない。農林双朗小学の建設の第一期に際し、土地を提供して政府も入学を承諾したにもかかわらず、後になって入学できないと告げられた過去の苦い経験がある。土地を提供したのだから、私たちが政府に寄付金を出す必要はないし、寄付金を出していないことが問題になるとは考えていなかった。しかも、私たちのマンションは学校から最も近い位置にある。だから、入学が許可されなかったことを私たちはみな不思議に思った。現在はそもそも献金することは許されていないはずであるが、どうやらそうでもないのかもしれない。したがって、私たちの社長は政府の人と協議して、農林双朗小学の第二期・第三期の建設にかかわらせてもらおうとしている。学校建設を支援すれば、私たちのマンションは長期にわたってその学校に入学する権利を享受できるはずだという。

こうした不安要素があるためであろう。販売員は次のように述べ、農林双朗小学に通えない場合の予防線を張った。現在、蓬江区の教員は学校間で異動するのが普通となっている。たとえ最も良いとされる紫茶小学の校長をしても、次に裏邨小学の校長になることもあるし、その逆もありうる。一般の教員も決して一つの学校にとどまるわけではなく異動するのだから、公立学校の場合、どの学校でもそれほど差はないという。現在は「師資配置均衡」（教員の公正な配置）が掲げられているので、昔のように良い教員を一つの学校に固めることはできないからだ。したがって、仮に裏邨小学に通うことになっても、大した問題ではないという。たしかに裏邨小学の周辺環境は少し良くないが、学校自体は悪くない。裏邨小学の教員がすべて正規教員であるのに対し、新設の農林双朗は、おそらく大部分の教員が「代課教師」（臨時的雇用の代用教員）ではないだろうか。であれば、教員については裏邨の方が良いということになるだろう、と。

筆者には、「泮海藍湾」というマンションに住む子どもが現在は裏邨小学にしか通えないことに対する言い訳のようにも聞こえた。教員の異動についても、不動産屋の店員［インフォーマント1］と意見が異なる。しかし、「名門校に通えることに焦点を合わせて部屋を購入するのは、学区再編が頻繁におこなわれる現状だとかなり難しく、リスクが大きすぎる。学校を探すことよりも、良い教員を探す方が良いのではないだろうか」という販売員の言葉は印象に残った。

(2) 「萊茵華庭」

次に訪れたのは、北の新市街地に位置する「萊茵華庭 (Rhine Mansion)」(写真 21、★

上) というマンション (デベロッパーは江門市五邑華僑新村開發有限公司) である。このマンションは最近まで紫茶小学 (北校区) の学区であったが、江門市蓬江区教育局が7月27日に発表した9月からの学区 (新入生募集区域) の通告により、新設の農林双朗小学の学区に編入された (表3)。

マンションに向かうタクシーの中で、30歳前後の男性運転手 [インフォーマント8] は次のようにまくし立てた。紫茶小学 (北校区) に通えるから他よりも高いお金を出して「萊茵華庭」を買ったのに、結局は農林双朗小学しか通えないのでは不満が出るのは当然であろう。紫茶小学 (北校区) と農林双朗小学とでは、天と地ほどの差があるじゃないか。一部のマンション購入者はもう返金を求めているようだ、と。彼の情報源はテレビのニュースである。どうやら数日前にそのような内容が放送されたらしい。7月末の発表後、名門校の学区から外されたマンションではこうした問題が顕在化し、テレビで放送されるまでになったようだ。

「萊茵華庭」に到着後、併設されたマンションギャラリーを訪ねてみた。すぐ目に飛び込んできたのは、壁に掲げられた周辺の地図である。その壁の地図には紫茶小学 (北校区) と範羅岡小学 (濱江校区)、パンフレットの地図 (図2) には紫茶小学 (北校区) が記載されているが、農林双朗小学は全く触れられていない。たしかに農林双朗小学が新設であることは事実だが、それだけでなく、おそらくは紫茶小学 (北校区) の学区から外されるという事態を想定していなかったものと考えられる。なぜなら、農林双朗小学はマンションの南西に位置するが、そもそも二つの地図はその方向を描こうとすらしていないからである。こうした描き方を見るにつけ、このマンションが7月末の発表までは紫茶小学 (北校区) の学区であることをセールスポイントにしていたことが、容易に想像できた。

30歳前後の男性販売員 [インフォーマント9] に学区再編の影響について話を聞いてみた (写真22、右上が呉さんと販売員)。すると、彼は「学位房」と「学区房」の違いを強調した。そして、このマンションは「学区房」にすぎず、もしも名門校への入学を重視するならば、ここは検討するに及ばないという。代わりに彼が勧めてきたのは、「学位房」である紫茶小学 (北校区) 付近の「星匯名庭」と、範羅岡小学 (濱江校区) 付近の「保利大都会」の二つであった。

そのうえで、販売員は次のように続けた。農林双朗小学は車ならここから10分で到着する距離にあるし、学区再編によってマンションの価格が下がることはほとんどないだろう。もしあったとしてもその割合はわずかなものであり、全体として価格はずっと上昇してきた。なぜなら、このマンションの購入者は全員がべつに名門校への入学を求めているわけではないからだ、と。



図2 莱茵华庭のパフレット

説明はそれなりに筋の通ったものである。しかし、学区再編がこのマンションの価格に影響を与える可能性はやはり否定できないし、不動産屋の店員 [インフォーマント 1・2] はすでに価格が暴落したと話していた。穿った見方をすれば、7月末に名門校の学区から外されたことを、どうにか正当化するために強弁していると捉えることもできよう。

6. おわりに

13日(土)を以て実質的な調査は終了した。上述したように一筋縄ではいかなかったが、江門市中心部の小学校の所在地をすべて確認し、周辺の景観も観察することができ、保護者や不動産屋・マンションギャラリーの販売員に対する聞き取りを通じて、学区再編や学校間格差が住民に与えている影響を、少しは明らかにすることができた。14日(日)

は、蓬江区との比較のために隣の新会区における学区の状況を少し観察し、15日（月）の午後は、中山大学で今回の調査について簡単な報告をおこなった。これで全日程が終了し、翌16日（火）に帰国の途についた。

では、今回の調査でいったいどのようなことが明らかになったのか。この点をまとめて本稿の結びとしたい。調査目的をもう一度確認しておく、中国都市部における学校間格差と学区再編に影響を受ける住民の生活意識や心情の究明と、それをとおしての、教育の機会均等とは何かという問題の考察である。また、中国でも教育の機会均等が掲げられてはいるが、制度と現実には違いが見られるはずであり、それが生まれる原因を具体的な事例から探ってみることもねらいとしていた。

江門市蓬江区教育局の「江門市蓬江区中心城区2016年公辦小学一年級招生簡章」（公立小学校新入生募集要項）によると、「就近入学」の原則に基づき、新入生供給源の状況、学校分布、募集規模、「社区」（民政部の定義では、一定地域の範囲内に住む人々によって構成される社会生活の共同体を指す）の所在、交通状況などの要素により、合理的に各学校の学区範囲（新入生募集区域の範囲）を区分しているという。しかも、現在は特別な場合を除いて、もちろん越境入学は認められていない。住民たちも越境入学が基本的に不可能であることは十分に理解している。表1の教職員一人当たりの児童数を見ても分かるように、学校間でこういう面で大きな差が出ないように、教育局は極力配慮している。学級数が多い少ないはあるにせよ、教育の機会均等に努めようとしているとみなしてよいだろう。

ところが、実際に江門市中心部の小学校を観察したり、保護者や不動産屋・マンションギャラリーの販売員などの話を聞いてみたりすると、やはり政策どおり上手くいっているわけではない、という印象を抱かざるを得ない。制度と現実とはやはり違うのだ。住民の意識の中には、あの学校が名門校で、あの学校はそうではないというランク付けの観念が深く刻み込まれている。保護者も、不動産屋・マンションギャラリーの販売員も、タクシーの運転手もみな口を揃えて、紫茶小学（南校区、北校区）と範羅岡小学（校本部、濱江校区）がツートップだと言っていた。その下には農林小学、実験小学などが続く。そのため、教育局による学区（新入生募集区域）の発表を受け、名門校に入学できなくなったマンションの購入者が返金を求めるという事態も発生するのだ。こうしたランクが住民に広く知れ渡っていること自体が、学校間格差が厳然として存在すること、ひいては教育機会の均等が実現されていないことを雄弁に物語っていると言えよう。

とはいえ、江門市中心部が一様にこのような状況下にあるわけではない。現地を調査して判明したことは、一口に江門市中心部といっても、大きく分けて二つの状況の異なる地区が存在することである。一つは「老城部」（旧市街地）と呼ぶべき地区である。それはおおよそ「迎賓大道中」「迎賓大道東」の南、「迎賓大道西」「西環路」の東という範囲であ

る。もう一つは周辺部（新市街地）である。おおよそ「迎賓大道中」「迎賓大道東」の北、「迎賓大道西」の西がその地区に当たる。

「老城部」（旧市街地）では、学校間の距離が近く、学校数も比較的多い。その中で紫茶・範羅岡・発展・美景の4校は、かつては別の名前であった学校を統合し、それぞれ二つの校地を所有している。統合の時期は、区志に掲載されたリストが2004年時点の小学校の状況を示し、今回入手できた2012-2017年の「蓬江区中心城区小学招生地段安排通告」の中に統合にかんする記載が見当たらないことから、2004年と2012年の間だと推測される。聞き取りによると、美景小学は約7年前（2009年か）、発展小学は5年前（2011年）という情報が得られた。二つの校地は、別の学年の児童が利用している。たとえば、紫茶小学（南校区）は1-2年がサブの校地、3-6年がメインの校地を利用している。保護者への聞き取りや学校施設および周辺の景観観察から判断しても、「老城部」（旧市街地）の学校は、全体として発展・成熟した段階にあり、学校間格差はそれほど大きくないと言えそうである。また、学区再編（新入生募集区域の変更）の回数も、表4が示すように、周辺部（新市街地）に比べると少ない（平均2.4回、周辺部は3.1回）。

したがって、この地区の住民は、どの学校が良いというランクはもちろん気にはしているものの、どの学校もそれほど変わらないという意識が強いと感じられた。たとえば、美景小学付近のレストランで話を聞いた40歳前後の男性[インフォーマント4]は、現在は中学生の子どもがかつて美景小学に通っていた。美景小学は重点学校ではなく一般学校であるが、彼はそれで構わないと考えていたようだ。彼によると、重点学校はたしかに良いかもしれないが、結局のところ、どの学校で勉強しても一緒である。高校進学は試験で合否が決まるのだから、子どもが良い成績を取り続けていれば、どのみち良い高校に進学できるはずという。また、中山公園で話を聞いた60歳前後の女性[インフォーマント5]は、幼稚園児の孫が名門校に入学することを望んでいない。彼女によると、もし孫に能力があれば名門校がもちろん良いだろうが、もしそうでなければ名門校に入学しても周囲についていけず、劣等感をもつだけであり、子どもの成長にかえってマイナスの影響を与えるだろうという。不動産屋の店員[インフォーマント2・3]の意見も含め、どの学校で学ぼうと大差はないという意識は、「老城部」（旧市街地）の住民に広く共有されているように思えた。

しかしながら、「老城部」（旧市街地）の住宅は全体的に古く、一部は相当に老朽化しており、住宅環境が良いとは決して言えない。そのため、富裕層は周辺部（新市街地）にすでに移り住んだり、これから移り住むことを計画していたりするが、非富裕層はそういうことが到底できない状況である。というのも、周辺部（新市街地）のマンション価格は年々上昇し、現在は江門市の中で最も高くなっており、非富裕層には手が出せないからである。

表4 新入生募集区域の住所数とその変化

番号	学校名	2012	2013	2014	2015	2016	区域変更	
1	培英小学	36	36	36	34	36	2回	
					-2	+2	+2	-2
2	北苑小学	22	22	22	19	16	3回	
			+1 -1	+2 -5	-3		+3	-9
3	甘光儀小学	61	61	60	65	66	3回	
			+1 -2	+5	+1		+7	-2
4	豊楽小学	55	57	52	52	55	4回	
		+2	+4 -9	+2 -2	+6 -3		+14	-14
5	美景小学	55	55	63	61	53	3回	
			+8	+1 -3	-8		+9	-11
6	江華小学	34	35	35	39	39	2回	
		+1		+4			+5	
7	啓明小学	50	43	43	43	43	2回	
		-7		+1 -1			+1	-8
8	紫茶小学 (南校区)	66	65	63	60	60	3回	
		+1 -2	+1 -3	+1 -4			+3	-9
9	紫茶小学 (北校区)	8	7	8	8	5	3回	
		+1 -2	+5 -4		-3		+6	-9
10	範羅岡小学 (校本部)	53	77	82	82	83	3回	
		+28 -4	+5		+1		+34	-4
11	範羅岡小学 (濱江校区)	—	—	12	16	16	1回*	
				+4			+4	
12	紫沙小学	66	47	45	45	45	3回	
		-19	-2	+1 -1			+1	-22
13	発展小学	36	38	39	39	39	2回	
		+4 -2	+1				+5	-2
14	陳白沙小学	30	30	30	32	33	2回	
				+2	+1		+3	
15	実験小学	28	36	31	32	32	3回	
		+9 -1	-5	+1			+10	-6
16	農林小学	15	14	21	21	21	2回	
		-1	+7				+7	-1
17	東風小学	20	16	16	18	21	3回	
		-4		+2	+3		+5	-4
18	北郊中心小学	24	24	24	27	30	2回	
				+3	+3		+6	
19	里村小学	27	27	30	28	15	4回	
		+1 -1	+4 -1	+2 -4	-13		+6	-19
20	丹灶小学 (校本部)	—	30	31	30	31	3回*	
			+1	-1	+1		+2	-1
21	丹灶小学 (篁荘校区)	—	17	16	16	17	2回*	
			-1		+1		+1	-1
22	農林双朗小学	—	—	—	—	23	—	

注1) 2012-2017年の「蓬江区中心城区小学招生地段安排通告」を基に作成した。

2) 番号は蓬江区教育局による「蓬江区中心城区2016年小学招生地段安排通告」に合わせた。図1とも一致。

3) 区域変更は全4回のうち何回かを示している。*は新設校や資料的制約のため全4回でないことを表す。

つまり、たとえば、名門校である紫茶小学（北校区）には、富裕層の子どもは入学できるが、非富裕層の子どもはどうあがいても入学できないのだ。

一方、周辺部（新市街地）では、ここ数年で三つの名門校の分校（紫茶は2011年、範羅岡は2015年、農林双朗2016年）が相次いで新設された。したがって、現在の周辺部（新市街地）の学校は2種類に大別される。名門校の分校と昔からある村の学校である。この両者の学校間格差はきわめて大きい。しかも、「老城部」（旧市街地）と比べて周辺部（新市街地）の学校間の距離は遠く、学区（新入生募集区域）もかなり広い。学区再編の回数も多い（表4）。名門校の周りには新しいマンションが次々と建設され、それにともない児童数は増加を続けており、それが学区再編の原因になっている。そのため、不動産屋・マンションギャラリーの販売員は「学位房」と「学区房」の違いを強調し、後で問題が発生しないように注意している。デベロッパーの中には、学校建設を支援したり、献金をしたりして政府と結託し、自分の開発したマンションが名門校の学区であり続けられるよう働きかけをおこなっている例も多く見られる。その結果、周辺部（新市街地）の中でも新設校と村の学校が隣接するような地区の場合、学区は空間的な広がりとしては描きづらく、マンション単位のある意味で点状（もちろんマンションにも空間的広がりはあるが）の分布となったり、飛び地があちこちに見られたりするという状況が発生している。

以上のように、江門市中心部にも二つの状況の異なる地区がある。このうち、学区再編と学校間格差の影響を強く受けているのは、間違いなく周辺部（新市街地）の方である。筆者らが宿泊したホテルは周辺部（新市街地）にあったが、そのそばの不動産屋の店員［インフォーマント1］は、なかば諦めた口調で次のように話した。「教育は公平でなければならない、資源は公平に分配されねばならないと、政府は毎年言っているが、実際にそうするのは難しい。医療サービスもそうだが、こういう資源は公平に分配するのは初めから不可能であり、その追求は人類の理想にすぎない」と。たしかに教育の機会均等、教育の公平性などというものは、彼が言うように理想にすぎないのかもしれない。しかし、義務教育の段階だけは出来るかぎり、それを追求すべきであろう。どの場所に住んでいても、家庭がどのような所得状況であっても、教育の機会が公平に与えられるべきである。そこから先どうなるかは、一人ひとりの素質や努力に委ねられていることは言うまでもない。

現在の中国の状況を見ていると、義務教育段階で、しかも公立学校であるにもかかわらず、貧富の差に起因する教育の不平等が、大手を振ってまかり通っていると思わざるを得ない。そこで蓄積された不平、不満、怒り、妬みなどは社会的緊張を生み出し⁸⁾、やがて大きな力となって表出しないとも限らない。仮にその全面的な実現は「画に描いた餅」であるにせよ、教育の機会均等をよりいっそう進めることが必要なはずである。ただ、これ

までの教育学の研究が明らかにしてきたように⁹⁾、機会の平等が達成されても、結果の平等が達成されるわけではない。しかし、中国の場合、まずは機会の平等が達成される必要があるだろう。

中国社会はいったいどこに向かおうとしているのだろうか。教育をめぐる現象の観察を通じて、今後も考えていきたい。本稿はそのためのささやかな一歩である。

謝辞

本稿は、京都大学の小島泰雄氏を代表者とする科研費（基盤研究（B））「中国華南の地域構造の再編に関する地理学的調査研究」（課題番号 15H05169）を使用した成果の一部である。調査に協力して下さった中山大学地理科学与規画学院の大学院生の呉寅姗さん、ポストドクターの馮雷さんに感謝の意を表したい。

- 1) 一般に学校間格差とは、「制度上同一の学校段階であるにもかかわらず、それぞれの学校の入学者の資質、教育的条件や教育的達成に差異があり、しかもそれに基づく社会的評価によって学校間が序列化され、学校歴の社会的価値に格差が生じている状態」のことを指す。秦政春「学校格差」（日本教育社会学会編『新教育社会学辞典』東洋館出版社、1986）106頁。
- 2) 中国の重点学校制度、越境入学、择校費など学校間格差にかかわる問題については、次の文献を参照した。(1)張玉林「転換期の中国教育—不平等の拡大とその動力—」日中社会学研究 13、2005、90-106頁。(2)南亮進・牧野文夫・羅歆鎮『中国の教育と経済発展』東洋経済新報社、2008。(3)楠山研『現代中国初中等教育の多様化と制度改革』東信堂、2010。(4)楠山研「中国における義務教育制度の弾力化と質補償」比較教育学研究 41、2010、49-62頁。(5)牧野文夫・羅歆鎮「誰が重点学校に進学したのか—教育を通じた格差固定化に関する分析—」中国経済研究 10-1、2013、82-94頁。(6)新井聡「義務教育段階の越境入学や入学者選抜の廃止に向けた政府の取組と北京市の実践—小中一貫制の拡大による義務教育学校の共同発展—」中国科学技術月報 107、2015。
- 3) (1)前掲注2) (4)。(2)一見真理子「政府の財政責任を法律上明確に—中国の義務教育改革を見る—」内外教育 5776、2007、2-4頁。
- 4) 広東省地図院編『江門市指南地図』広東省地図出版社、2016。
- 5) 江門市統計局編『江門統計年鑑 2010-2015』江門市統計局・国家統計局江門調査隊、2011-2016。
- 6) 江門市地方志編纂委員会編『江門市志』方志出版社、2011。
- 7) 江門市蓬江区地方志編纂委員会編『江門市蓬江区志（1984-2014）』方志出版社、2012。
- 8) 前掲2) (1) 103-104頁。張が論文を発表した2005年から10年が経過しているにもかかわらず、根本的に状況はさほど改善していないように思われる。
- 9) (1) 酒井朗・多賀太・中村高康編『よくわかる教育社会学』ミネルヴァ書房、2012。(2) 岡田昭人『教育の機会均等』学文社、2013。



写真1 紫茶小学（北校区）



写真4 学習塾に貼られた講師紹介



写真2 紫茶小学(北校区)の「荣誉墙」



写真5 培英小学のプレート



写真3 丹灶小学（簞莊分校）

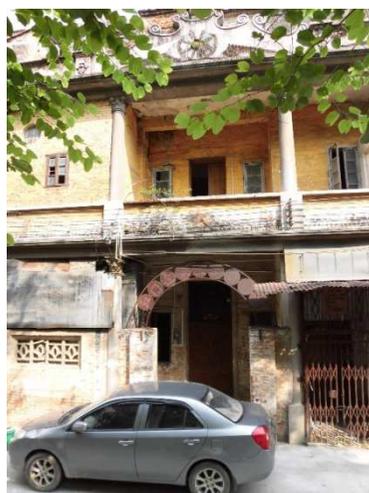


写真6 造纸厂子弟小学



写真7 紫茶小学（南校区）



写真10 城中村である裏邨



写真8 範羅岡小学（校本部）



写真11 裏邨小学



写真9 実験小学



写真12 農林双朗小学



写真 13 保利大都会



写真 16 「名校圈」の広告



写真 14 範羅岡小学（濱江校区）



写真 17 蓬江区文化館（元は堤東小学）



写真 15 保利大都会の広告



写真 18 範羅岡小学（紫茶路校区）



写真 19 泮海藍湾



写真 21 莱茵华庭



写真 20 泮海藍湾の販売店の周辺図



写真 22 聞き取りの様子